

4 一人暮らしの認知症の母を放任していた事例

虐待種類 ● 介護放棄、放任

《相談・援助に関わった職種》

ケアマネジャー、ディサービス事業所担当者、配食サービス事業所担当者、
民生委員、町内会関係者

本人の状況

- 女性 80歳
- 介護認定区分 要支援

養護者(虐待者)

- 娘(次女、三女)
*本人と同じ市内に在住。

家族の状況

- 一人暮らし
*長男：関東地方在住(音信不通) 次女：市内在住(就労中)
長女：九州地方在住 三女：市内在住(就労中)

発見の動機

- ケアマネジャーが初回訪問時、室内の極度の不衛生状況を発見

経済状況

- 厚生年金で生活、月約8万円、自己管理

家族関係図

(一人暮らし)



相談から援助までの経過

- ①本人が「自宅風呂に入るのが大変だ」ということを、行きつけの美容院で話したことがきっかけとなり居宅介護支援事業所に介入依頼の電話がある。
- ②ケアマネジャーが事情聴取のため自宅を訪問。部屋はネズミの糞が散乱、ほこりやススまみれで鼻を突く臭気、ゴミで足の踏み場もない自宅の劣悪な生活環境を認める。
- ③アセスメントをする中で、子供達の訪問がほとんどないこと、また、本人は外出、買い物、通院などはタクシーを使い何とか自分で行っているものの、理解力の乏しさや日時を間違えることなどから認知症が疑われ、実際、日常の生活行動がちぐはぐであることが判明した。
- ④介護保険制度の利用等を中心に主にケアマネジャーが関わることとなったが、本人宅に電話をかけても不在であったり、受話器のコードが外れていてつながらなかったりしたため、しばらくの間は毎日のように訪問した。
- ⑤市内在住の次女に連絡を取るが、次女は仕事が忙しいことなどを理由に関わりを敬遠し、三女に連絡取るよう要請される。
- ⑥三女に連絡をとり、本人の状況を説明しても、仕事を理由に本人を訪問してくれない。電話をしても、つながらずなかなか連絡がとれない。面談を日程調整しても、約束した日時に現れない。
- ⑦三女に電話で話しても「はい、はい」と聞き流すだけ。また、「母は私たちの言うことを聞かない。本人の好きなようにさせて下さい」と一人暮らしの母親には全く無関心な様子が伺えた。
- ⑧三女に本人のディサービス利用時の様子や郵便物（督促状）、年金等についてケアマネジャーが得た情報を電話でこまめに連絡した。印象づけたい事柄については手紙を送った。問題点ばかり指摘されると聞きたくなさそうな反応があったため、具体的な対処方法を助言し依頼するようになった。

ワンポイントアドバイス

③に関してー

〈アセスメント(評価)〉

- * 本人はどのような状況にあり、なぜこのような状況になったのか
- * 家族はどんな関わりを持ってきたのか。
- * 家族の関係はどうか。どんな問題が家族の中にあっただのか。
- * どのようにして解決してきたのか
- * 本人はをどうしたいのか
- * 家族は本人をどうしたいのか
等
本人や家族について把握し理解することがアセスメントです。
アセスメントして洞察することで、問題点が見え解決への糸口が掴めるようになるでしょう。

⑥に関してー

〈面接・訪問時の留意〉

- * 訪問して面接を行う場合には、事前に連絡をとり、訪問日を伝え、了解を得ることが必要です。
しかし、虐待があるからと言って訪問をすることは、拒否的な態度に出してしまうので、言い方を工夫する必要があります。
- ただし、状況によっては、虐待とはっきり言うことが必要な場合も考えられます。
- * 訪問面接は複数で行うことが必要です。

関係機関とのネットワーク

(1) 関係機関との関わり

〈初期〉 居宅介護支援事業所、 ディサービス事業所

- ・ディサービス利用時に把握される状況（何か月も入浴されていない様子、衣類の汚れ、異臭が漂うなど）ディサービス事業所の担当者からケアマネジャーに随時報告がある。
- また、本人は、掃除や洗濯は自分でやっているからヘルパー利用を拒否しているとの情報もあり。

〈中期〉 民生委員、配食サービス事業所

- ・民生委員は訪問しても本人と会えないことが多かったことから、ケアマネジャーが民生委員と同行訪問をしたり、情報交換も行った。
- ・栄養改善の目的から当初、本人が拒否していた配食サービスを民生委員や家族の勧めにより開始した。

〈後期〉 ディサービス事業所、 配食サービス事業所、 民生委員、町内会関係者

- ・サービスの利用や日常生活の様子について、各事業所から情報が寄せられる。
- ・火気の心配やネズミのことなどで近隣から苦情があるとのことで民生委員、町内会関係者から施設の入所について勧められる。

(2) 関係機関の役割分担

- ・ディサービス事業所は利用時の状況をケアマネジャーに随時連絡する。
- ・民生委員は定期的に見守り訪問を続け、気になることはケアマネジャーに連絡する。
- ・ケアマネジャーは定期訪問を継続し、各所から寄せられた情報について確認した上で三女へ連絡する。

〈検討した内容〉

- * 問題点のみの連絡ではなく、こうしてみよう、こうしたらよいのではないかなど、常に対処方法を検討した。
- * 対処方法は具体的に検討すること。
- * それぞれの役割分担、情報、意見交換の場を定期的に設けること。

〈インフォーマル資源〉

- * 過度な関わりを期待するのは控えなければいけません。独居高齢者の場合は、身近な友人や知人等、インフォーマルの方々のちょっとした関わりが事態を好転させる糸口になったり、本人の生活行動パターンなど様々な情報が収集できる場合があります。

〈相談窓口の一本化〉

- * 複数の関係機関が関わっていて、それぞれから連絡が入ったり、訪問したりすることで、援助を受けている人がとまどうことから、中心的に関わっていく人を決め、相手方には、誰を窓口としたか、伝えておく方がスムーズに展開していきます。

支援後の経過

- ①三女から「他人のことなのにいつもすみません。自分の親なのだから行ってみるようになります。」と気持ちの変化が現れる。
- ②本人のことについて無関心であった娘達がお互いに連絡を取り合うようになる。
- ③娘達の勧めにより本人は、娘達の家からほど近いグループホームに入所となる。

支援に対する評価

- ①娘達は、生活の場が離れていたため本人の認知症に気付けなかった。
娘達は、他人から問題点を指摘され当然不愉快な思いをしたと思われるし、指摘を受けた内容から本人との関わりに億劫さも抱いたと思われる。本人も親としてのプライドもあり、娘達の介入に対して否定的な面があった。そのため、娘達が母の生活に対して危機感を持ってもらうまで時間がかかった。
親子関係に亀裂が生じないように注意した。
 - ②三女への連絡等については窓口を一本化し、ケアマネジャーが情報収集して連絡するようにした。
 - ③認知症高齢者を現状の地域社会で見守っていくことの限界を痛感した。介護が必要になっても安心して暮らせる町づくりとはどういうものなのか、住民一人ひとりが再度考え意識していくことの大切さを感じた。
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-